
ファンタジア・ファンタジア

佐嶋千代美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジア・ファンタジア

【Nコード】

N8045Y

【作者名】

佐嶋千代美

【あらすじ】

夏の始まり。

続けていた部活動を辞めることにした少女は、思いがけない形で幼馴染の青年と再会する。

目標、夢、好きな事、仕事にすること……、壁にぶつかりながらも伸びゆく心の過渡期。

2010年・函館市民文芸賞（佳作）に加筆修正

個人サイト：Spiral掲載 <http://sspiral.fool.jp/s/>

(一)

高校二年生の夏休みが来る前に、退部届を出した。

春に痛めた膝のリハビリをしていたところ、このまま過激な運動を続けることは無理だと診断されたから。

嘘。

部活を辞めたのは、本当。けれど、退部届なんて、何日間も悩んで悩んで書き直して握りしめて汗でシワシワになったそれは、顧問の先生に受け取ってもらう前に「そう」の一言で片づけられてしまい、日の目を見る事なくゴミ箱へ捨てられた。

膝を痛めたのは、本当。リハビリだって続けていた。だけど、順調に回復していて、この夏には復帰できるということだった。

辞める為の嘘の言い訳ならいくつでも挙げられた。けれど、本音だけは形にできなかった。ならなかった。

辞めよう、そう思った事だけは、本当。

ジワジワと暑くなり始めた青空を見上げながら、一人きりの放課後を、私は自転車で駆け抜けた。

短くカットされた髪のを、風がさらってゆくのが心地よかった。胸のざわめきごと、このまま全て風に溶けて消えてしまえばいいのに。

「おかえり、良子。早いわね」

「うん。部活、辞めてきた」

習慣づけられた「ただいま」の声に対し、キッチンに立っていた母がリビングへ顔を覗かせた。そして続けた私の言葉に、一瞬だけ目を見開き、「そう」と返す。なんだ、その反応。

「当たり前、つばい？」

「驚きを、精いっぱい隠してるの」

小柄で童顔であるため、実際の年齢より若く見られがちな母が、可愛らしくも困った表情で笑って見せて、「とりあえず着替えてらっしゃい」と追い立てる。

私は唇を尖らせながら二階の自室へと向かった。その間にも、大きく息を吐く。

自分にとっては一世一代の大決心も、他人様の目には然程の事でもないんだ。そりゃ、そうだ。

……部活は 小学生の頃から続けていた習い事の延長で、高校進学を機に、「部活動」へと切り替えた。

そして目の当たりにする壁。

「勝たなくちゃいけない」、三年間という短い時間の中、運動部として目指すそれは当たり前前の心理なんだろうけれど、ついて行けなかった。ついて行きたくなかった。気持ち悪いと思った。負けたらオシマイ？　なんだ、それ。

自分を磨くためのものではないけんだろうか。身体を動かすことを楽しむだけじゃ、駄目なんだろうか。

それは、自分が結果を出せないからの、言い訳なんだろうか。

それは実の無い理想、幻想でしかないの？

一年生の頃は、矛盾や疑問に挟まれながら、何とか乗り越えられた。でも。

二年になり、膝を痛めた。成長期に起因するそうで、重大なダメージじゃない。けれど、そうして部活と距離を置くことで、ますます自分のモチベーションって奴がわからなくなった。

軽い運動なら参加できるよ、そう許可が下りた事は、誰にも内緒にして、通院日ではなくても学校を抜けるようになった。

多分、顧問の先生も気づいていたんだろう。コイツ、秒読みだな、って思っていたんだ。

入部当初から勝負に関して気の薄かった私に、同期の部員達もしつこく声を掛けることは無くなっていた。

でも、部活を辞めて、そうして。私はどうしたいんだろう。あの場に居たくない、その意識ばかりが強くて、先なんか見えなかった。気持ちを切り替えるように、ドアノブを捻って部屋へ入る。

殺風景な自分の部屋を見渡して、もう一つため息。

部活をさぼることはあつたけど、良心の呵責があつたから、悪い遊びに手を出すことは無かつた。その結果としての、「女子高生らしくない」無駄の無さ過ぎる部屋。強い意志を持たないまま、時間を過ごしてきた証明のように思えて、なんとも気まずい。

また教室へ戻ろうか。それもスツキリしないな。

勝負事を持ち込まれるのは嫌いだつたけど、それを別にしても自分はその競技自体が好きなのかと問われれば、ちよつと違うように思える。

暑いのも疲れるのも痛いのも好きじゃない。

どうして、こんなものを五年以上も続けていたのかな？

人よりちよつと背が高かつたから、優遇はされた。でも、個人的な賞を取ったことはない。出席率の高さだけでもらえる「努力賞」、それが、私が個人としてもらった、唯一の特別なもの。

簡素な飾り棚に大切にしまわれているそれを眺めて、苦笑いをこぼした。

バイバイ、剣道。

やってるの？って聞かれると面倒だから、この盾は箱か何か、目につかない場所へ隠すべきだろうか。

セーラー服のタイに指を伸ばしながら、ぼんやりとそんなことを考えた。

部屋着に替えて、リビングへ戻る。

ふわり、とフルーツ系の香りが鼻をついた。

「紅茶？ 珍しいね」

「町内会でね、お菓子をもらって来たのよ」

トレイに、紅茶ポットとカップ、それからこの角度では見えない

けれど、何やらお菓子の乗ったお皿を載せ、母が運んでくる。

「……町内会」

そこで紅茶に合うようなお菓子？

母は何かと携わっているようだけれど、私自身は資源ゴミの持ち込みなんかで覗いたきりのその場所は、年輩の方が多く出入りしているイメージ。紅茶に合う、洒落たものを食べる様子が想像できない。

「河野さんのお兄ちゃん、覚えてるかしら」

「河野さん……。トオル君？」

それはまた、懐かしい名前だ。

近所に住んでいて、幼い頃によく遊んでもらったお兄さん。

かなり年が離れていたから、彼が高校に入学する頃には、遊ぶことは無かったし、その後の進路も知らない。

「そう。そのトオル君が作ってくれたのよ」

「へえ……。えええええ？」

私は大袈裟に驚いた。私が部活辞めた事よりびっくりだ。

そりゃあ、お母さんも私の告白に動じないよ。

「あのひと、そっちに進学してたんだ」

「みたいね。詳しくは聞いてないけど。とっても美味しかったから、あんたの分まで貰って帰って来たのよ」

「それは……。ありがとう」

食卓に、ストンと座る。その前に、ティーカップとお菓子が並べられた。

普段から紅茶なんて飲む家ではないから、なんだか不思議な気分。お菓子は、プラスチック製のプリンカップに、スポンジケーキと生クリームが層になったもので、てっぺんにはラズベリーとミントが可愛らしくトッピングされている。それから、小さな星型のクッキーが立っていた。なんですか、この愛らしさ。そこらのケーキ屋さんのショーケースに並んでいるような姿だ。

記憶の中のトオル君は、非常に手先が不器用で、ちびっ子の私に

さえ笑われていたものだけだ。

段取りも悪くて、私や他のチビ達に冷やかされて、拗ねたような表情と、仕方がないなという笑顔と。それでも飽きずに、よく面倒をみてくれたものだ、今にしては思う。

当時、近所では共働きや片親で鍵っ子だった子供らの、相手をするのがトオル君の役割のようになっていた。今日は河野のお兄ちゃんと遊んでね、と言えば伝わるし、お礼だからと持って行ったお菓子を分け合って食べるのが楽しみだった。

今でこそ、我が家の母も専業主婦をしているけれど、昔はお世話になったもの。

ああ、そういえば

柔らかな表面にスプーンを差し入れて、私は思い出した。

トオル君と遊ばなくなったのは、剣道を習い始めてからだだった。

そうして……、辞めた途端に、こんな形で近況を知ることになるうとは。

これって運命？ だったら素敵。

残念ながら、決して見栄えが良いとは言えないトオル君は、私の初恋相手ではなかったけれど、それでも悪い気はしなかった。

「……ね。怒ってる？」

「何を？ ああ、」

冷たく甘いものを口に運びながら、私は上目遣いで母に尋ねる。

あ、生クリームだと思ったらレアチーズ。しかもお約束のレモンじやなくて、オレンジ風味なのが優しい。口内に広がる優しい味に、私の緊張も幾分かほぐれていた。帰宅前の、破裂しそうな思いは和らいでいる。どんな説教も、大人しく聞き入れる覚悟が出来ていた。「いつまでも子供じゃないんだもの、あんたがそう決めたんだったら、止めないわよ。『辞めてきた』んでしょう？」

事後承諾であることを強調して、母はニツコリと笑った。

「中学に入った頃からかしらね、あまり楽しそうに通っていたようではなかったから、周囲に変な気を遣ってズルズル続けるよりは、

良いと思うわ」

「そ、……っか」

見抜かれていたとは。

ズズズ、と嚼る紅茶の香りがまた良い。アプリコットの香りは、オレンジ風味のレアチーズケーキに合っていて、幸せな気分にくれる。

「ケーキ……美味しいね」

「そうね」

話を逸らそうとしたわけではなく、純粹にポトリと感想がこぼれる。

なんだ、この幸せな気分。

フワフワで、スルッと溶ける。鼻を抜ける香りが爽やかで。

「お父さんがね。あんたが膝を怪我したときに、言っていたわ。望むようにさせてもらんなさい、って。」

だから、気に病まないの。

カップにおかわりの紅茶を注ぎながら、母は優しくそう言った。

……なんだ、それ。泣きたくなるじゃないか。

いつもは仕事ばかりでほとんど顔を合わせる事のない父が、そうやって私の事を気にかけてくれていたなんて初めて知った。今度の休みは、肩でも揉もう。そう思った。

部活を辞める。

私にとって、一大決心だったそれは、そうやって受理された。

(二)

中学生までは通学路だった住宅街も、高校へ入り、方向が逆になったというだけで、随分と懐かしく感じるものだ。

美味しいケーキを食べた翌日の放課後。

容器は洗って町内会会館に置いていてくれれば取りに来るから、という話だったけれど、興味半分で私はトオル君の家を訪ねることにした。

本格的なお菓子だったから、市内のケーキ屋さんにも勤めているのかと思っていたが、そうではなく、家庭で作ったものだという通りを二、三本越えた程度の距離だけれど、私の家と違って、トオル君の家の近くは潮の香りがする。

ああ、そうだ。この匂い。懐かしいな。

あの坂を下りて、子供たちで海へ遊びに行ったこともあったなあ。岩場で足を滑らせて、大泣きした私を、トオル君があわてて背負って連れ帰ってくれたこともあった。その時から、私にとってのトオル君は「お父さん」ポジションになって、恋がどうのとか、そういう相手ではなくなっただんだと思う。

昔の事を思い出しながら、私は目的の家を見つけた。

昔と変わらない、白壁の平屋建て。表札には「河野」とだけ。

ちよつと緊張して、チャイムを鳴らす。

おばさんとも、しばらく会っていないから、不審に思われないだろうか。ドキドキする。

インターフォンはなく、何度か押してから間延びした声が返ってきた。若い男の人の声。…あれ？

「すいません、遅くて。……えー、と」

擦り切れたジーンズ、くたびれた黒のＴシャツ。頭に巻いていたタオルを外しながら姿を見せたのは……

「トオル君？」

その容姿に昔の面影は見い出せないが、年格好から判断して、呼びかけてみる。こんな時間に、大の大人がどうして実家にいるのだろう。お仕事は？

「そう、ですけど」

戸惑ったように、男の人は眉をひそめる。う、一重瞼で目を眇められると、なんだか睨まれているみたい。細身だけどガツシリした骨格は見えてとれて、貧弱な印象を与えない。

記憶の中の、幼いトオル君の笑顔が崩れてゆく。それ位の、変貌ぶりだった。

「小林さんのところの良子ちゃんかー 久しぶりだね」

本当に覚えているのだろうか、妙にドキドキしながらも、私は何年か振りに、河野家にお邪魔した。

懐かしい匂いのリビングに通され、ソファに適当に座る。

「容器、届けてもらって悪いな。急がなかったのに」

物腰の柔らかさは変わっていないかもしれない。少しだけ、ほっとする。

「あ、いえ。とても美味しかったので、感想も言いたくて」

「……………」

「あの？」

カチャカチャとコーヒーマーカーをセットしていたトオル君が、驚いた表情でこちらを見つめていた。

「良子ちゃん、何年生になるんだっけ」

「高校……二年、ですけど」

校名も告げると、納得したように、それでいてまた驚いたように、

「ああ」と声を上げる。

「剣道やってたんだよね。それでか！」

「どれですか」

「言葉遣いが綺麗なの。俺の職場の高校生ったら酷くてさー」

支配人にもタメ口よ。どこから矯正すればいいのか、わからん」

「ああ……」

それは。確かに。

運動部や吹奏楽部などといった、上下関係の厳しい部活以外だと私の学校も酷いよなあ　というより、部内ではしっかりしているけれど、それぞれのクラスに戻ると酷い。

私は親の躾とか、それこそ剣道だとかで叩き込まれてしまっているから、今更、担任の先生へ粗暴な口調で話しかけると命令されても絶対無理。

「トオル君は今日は、仕事お休みなの？　ケーキ屋さんじゃないって聞いたけど」

せつかく褒められたというのに、私は、小学生の気分に戻ってしまっている。しかしトオル君は気に留める様子はなかった。

「うん、そう。今はファミレス。」

「ファミレスの厨房？　料理も作るの？」

「いや、ホールだ。ウェイターだよ」

カタン、テーブルの上に、クッキーが数枚乗った皿が差し出される。形を見るに、先日のケーキに使った飾り用のものようだ。

「え、え、えええ？」

もったいない。そう言おうとした矢先に、チャイムが鳴った。

トオル君はピクン、と一瞬だけ身体を強張らせ、それから「ちょっとごめん」と続け、玄関へ向かった。

会話の内容は解らなかったけれど、声の高さから女性だということとは判断できた。

それからザワザワと気配がして、二人揃ってリビングへ。

トオル君と並んで現れた小柄な女性は、肩口で切り揃えられた黒髪を揺らし、小首を傾げて微笑んだ。切れ長の目が、猫のようにすうつと細められる。年はトオル君と同じくらい、かな？

「はじめまして、安藤です。河野の友人よ。怖くないから安心して」

「あ……、ええと、小林良子です」

ぎこちなく名乗り返すと、安藤さんは「良子ちゃん」、と口の中で呟き、私の隣へ腰を下ろした。

「河野、注文のラベル作ってきたから。さっさと終わらせる前にコーヒーが飲みたいわ」

そして淹れたてのコーヒーの香りを嗅ぎつけ、家主へリクエスト。トオル君は鼻を鳴らして笑いながら、お茶の時間の準備を始めた。その合間に、私は安藤さんへ質問を投げかける。

「あの、ラベルって？」

テーブル上のクッキーへ手を伸ばした安藤さんは動きを止めて、膝の上に置いてあるA四サイズの封筒を見せた。

「焼き菓子の原材料ラベル。河野に、焼き菓子の詰め合わせをお願いしてたのよ。これは、その仕上げ」

「詰め合わせ……。へえ」

汚さないように、その封筒を受け取り、中を覗かせてもらう。

プレーンクッキー、ココナツサブレ、スティックパイ、ガレット、マドレーヌ。小洒落たケーキ屋さんに並んでいそうなラインナップ。それらの材料がズラリと印刷されたラベルが……。何セットあるんだろう？

あ、製造責任者が『河野通』だつて。住所と電話番号はこの家。店を構えているわけではないのに、何だか本格的。

「私の家がね、明日、法要なの。そんな大人数が集まるわけでもないんだけど、お土産用に配りたくて、ね」

「へえ……」

トオル君は、そういうことをしているんだ。ファミレスで働いていると言っていたから、これは副業なのかな。

ほどなくして、コーヒータイム。

空容器を返しに来ただけの私が、居ていいものなのだろうか。なんとなく居心地の悪さを感じながらも、美味しいコーヒーとクッキーに、つい引きとめられてしまう。

他愛ない会話の中で、トオル君が東京のケーキ屋さんで働いてい

た事、身体を壊して去年帰郷した事、安藤さんは観光地区の外れのカフェで働いている事を知った。

そして当然ながら、話の矛先は私にも向けられる。

「そっか、あの高校かぁ。運動系の部活が強いよね。良子ちゃんは何かやってるの？」

予想通りの質問に、私はキュツと心臓を掴まれた気がした。絞り出すように、答える。

「う あー、剣道部を……辞めました。昨日。」

両親にも、周囲にも承諾を得たというのに、気まずさはどうしても抜けない。まだ、抜けない。

けれど、慣れなくちゃいけない。悪いことではない、はずだ。

途中で体がついて行かない、飽きた、厭になった、そういつて離脱する人間なんて、私だけじゃないでしょう？自分で決めた事に、後ろめたさなんて要らないはずだ。

「なるほど。だからか」

合点がいったと、安藤さんが呟く。その口元には、柔らかな笑みが刻まれていて、私は驚いた。

「指先が綺麗。変にいじってないのね。髪も」

「それは……まあ」

ネイルなんてプチ程度にも試した事はないし、髪は小学生の頃から黒のショートで通してる。ちなみにピアスも空けていません。思えばそれらは全部、「剣道をやっているから」だった。

さっきの言葉遣いもそうだけれど、大人から見れば、そんなところが好印象なのだろうか。

「財産ね」

ふふ、と安藤さんが猫のように笑う。財産？これが？私は思わず手を止めて、己の両の手をまじまじと見つめる。それから耳に触れる。

「若さってのは有限資源で非売品の貴重品だよ。遊びなんて大人になってから出来るんだから。大切にね」

「非売品は、そりゃ貴重だよな」

ぼん、と私の肩を叩く安藤さんの言葉に、トオル君が声を重ねた。
「俺の財産は、これかね」

そうして、手を閉じ開きする。よく見ると、シャツから伸びる筋肉質の腕には、小さな傷がいくつかあった。私の視線に気づいた安藤さんが、オープンでの火傷痕だということを、小声で教えてくれた。

「トオル君、いつかはお店を開くの？」

他意はなく、口をついた質問だった。

東京のケーキ屋さんで働いて……身体を壊して帰ってきたというけれど、先日の、そして今のお菓子を食べていると、その辺りにあるケーキ屋さんに負けないくらい美味しい。ううん、ずっと美味しい。こんな腕前だったら、いつだってお店を持てるんじゃないだろうかって思う。

期待を込めて、トオル君を見上げると、予想に反し、彼は苦い表情をしていた。聞いてはいけない事、だったのだろうか。

長く間をとって、それからトオル君は私の目を見て、口を開いた。

「うーん。良子ちゃんは、また剣道をやり直したい？」

「……え」

それは、予想外のパンチだった。

だってそんなの、比べる事じゃないよ。高校生の部活と、大人の職業なんて。

「同じだよ。好き、ってだけじゃどうにもできないことがあるし、好きって気持ちさえあれば、どうしても出来ることもある」

「そんなの……わかんない」

そもそも、部活を辞めた理由なんて、話していないじゃない。

トオル君がケーキ屋さんを辞めた理由も、詳しくは知らないけれど。

「嫌いで辞めた剣道部員が、そんな規則キッチリの格好をしているワケないだろ。ちっちゃい頃から習っていてさ」

言葉を失っている私に、トオル君は笑いながら教えてくれた。

「好きだったんだろ」

断定的なその言葉に。どうしてか、泣きたくなくなってしまった。

トオル君も、それ以上は何も言わず、安藤さんがクツキーを齧る音だけが、静まり返ったリビングに響いた。

その日、焼き菓子のラベル貼りを手伝った私は、帰りがけに「御褒美」と、余分に作られた一袋をもらって帰った。ふんわりと、良い香りがして、心が緩んで、私は誰も見ていないところで少しだけ、泣いた。

(三)

部活を辞めて。長く続けていた剣道を辞めて。何かが変わるのかと思った。勝負事に臆病で卑屈な、厭な自分を変えられると思った。変わったと言え、変わったのかもしれない。けれどそれは、自分一人による変化ではない。自分一人の変化だけで済ませられることではない。

休み時間の廊下を、同学年の剣道部員が走る姿を見かけた。端のクラスの子への伝達だろう。以前は、ここへも顔を出してからだったのに、迷うことなく彼女は通り過ぎる。

私は辞めるべくして辞めたのだ。後悔は無いけれど、こうして世界が断絶されたのかと目の当たりにすると、流石に胸が痛んだ。

引き止めて欲しかったわけではない、そうだとしても自分は辞めていた。苦いものを飲み込む思いで、私は自分の気持ちを確認する。漫然と続く日常も、勝利だけを追いかける理念も嫌だった。けど、部活を通して知り合った仲間達は嫌いじゃなかった。

私は、どうなりたかったんだろう？

全ては終わってしまったこと。

好きだったんだろ、と語尾を下げたトオル君の声が、頭の中で回る。

それから、先日のトオル君が作ったケーキを思い出す。夢みたいに美味しかった。あんなの、お菓子作りが趣味だという友達のお母さんにだって作れない。それくらいは、私にも解る。それに、安藤さんに頼まれて作ったという焼き菓子。驚く事に五十セット。家庭の趣味の範囲なんて軽く飛び越えている。

どうして、トオル君は、それをお仕事にしなくなったんだろう。身体を壊しただなんて言っていたけど、あんなに美味しいお菓子を作れるじゃないか。

冷たい机に突っ伏して、私は教室の扉で四角く切り取られた廊下を眺めながら考えた。

あの人は今、レストランでお仕事かな？どこのお店か、聞くのを忘れたなあ。

今の仕事は、楽しいのかな。好きで続けているのかな。

お菓子の事は趣味だって、本当に、割り切っているのかな。

嘘を吐く必要も無く、まっすぐ帰宅する事を許された放課後。

一週間経つけれど、なかなか慣れる事が出来ない。胸を張ればいい、そう思いはするけれど、理屈ばかりが空回りして、体育館の離れにある格技場を目で追ってしまう。竹刀の打ち合う音が、気合いの入った声が懐かしい、と感じてしまうなんて。

こんなの、ただの感傷だ。そのうち忘れる。目を閉じて首を振って、私は駐輪場を後にした。

私の気持ちを代弁するように、雨を降らすでもなく、灰色の雲が重く垂れていた。

そのまま帰宅する気分にはなれなくて、ルートを少し変更する。教えてもらった、安藤さんの勤めるカフェを目指す。

ランチが絶品だというそのお店は正直言って、女子高生が、それも一人で行くような所じゃない。

それでも、安藤さんと話がしたいと思って……行ったところで出来る確証も無いけれど、具体的に何を話したいかなんて無かったけれど、ただ今はその店を目指した。

観光地区の外れにあるそのお店は、急勾配の坂を登ったところにある、見下ろす海がとても綺麗。晴れていたなら、きつともっと素敵なんだろうな。

額の汗をぬぐいながら、アーリーアメリカン調の建物の横へ自転車を停め、恐る恐る、蔦のアーチをくぐってドアを開ける。カラン、と可愛いドアベルが鳴った。

平日の十六時。カフェとしてはお客さんの引く時間帯らしく、店内には一組のカップルが居るだけだった。

「良子ちゃん、来てくれたんだ」

キッチリした白いシャツに黒のパンツ、濃緑のエプロン姿の安藤さんが、笑顔で出迎えてくれた。もともと短い髪をピンできっちり止めて清潔感がある。トオル君の家で会った時とは、なんだか印象が違う。これが「お仕事モード」というものなのかな。

「学校の帰り？」

「あ、はい」

制服姿だから悪目立ち……でも、視線を気にする必要が無い事は、静かな店内を見ればわかる。

「景色が売りの店だけど。よかったら、カウンターへどうぞ。」

私が何事か抱えているのを察してくれたのか、そう誘ってくれた。お言葉に甘えて、私はカウンター用の高い椅子に腰を掛けた。

差し出されたメニューを見て、所持金を確認しながらケーキセツトを頼む。その時に、安藤さんがクスツと笑った。

「ここのケーキは、河野が作っているわけじゃないからね」

そう、意味深に付け加えて。

セツトと一緒に頼んだ紅茶は、安藤さんがオススメだというスリランカティー。ウヴァ、というその茶葉は、軽い飲み口と、後から来るキュツとした渋みが利いていて、どこことなく日本茶みたい？

飲み易くて、とても美味しかった。

ケーキメニューは、バイクドチーズにクラシックショコラ、プディングの三種から選ぶことが出来て、私はチーズケーキを頼んだ。カッチリ焼かれた、ニューヨークタイプのチーズケーキ。レモンの風味が利いて、うん、美味しい。美味しいけど、……？

「美味しいでしょう」

「無難な味ですね」

思わずポロツと答え、それから私は咽込んだ。

「すつ、すみません……！」

カウンターの奥に居る調理スタッフの人の動きが止まるのが見えてしまった。

私ったら、なんて失礼な……！

「これが、商売の味と言う奴よ」

「……え」

「万人好みの最大公約数にして、作り手との利害の一致。好きってだけじゃ、どうにもならないってものね」

「あ……」

トオル君が、話していたこと。私が納得いかない気持ちでいた事を、察してくれていたんだ。

「ちなみにここの調理はオーナーが一手にやっていてね。軽食メニューには余念がないわ。あと紅茶。今度はランチタイムに来てみてね」

「……はい。ごめんなさい」

ま、まさか奥の人がオーナーさんだったとは。二重に気まずい。

シヨボくれる私の様子を見て、愉快そうに安藤さんは笑っていた。その頃、ポツ、と雨が降り出した。窓際に座っていたカップルが声を上げたので振り返ると、抱え込んだ水分を堪え切れなくなつたとばかりに雲から雫が落ち始めたところだった。

男性が片手を挙げ、追加オーダーをする。返事をしながら、安藤さんはそちらへと足を向けた。

ケーキセツト七百円でどれだけ長居をしていいものやら解らないけれど、私もこの雨が止むまで、お世話になろうかと考える。

陽が落ちる前の、薄暗い雨降りのカフェで紅茶。田舎の女子高生が過ごすには、あまりにも贅沢な時間。

コンビニやファストフードで友達と騒ぐのも良いけれど、これはこれで悪くなかった。

雨音を振り返りながら、滲み始めた景色を眺め、
「フアンタジックですよね」

そんなことを呟くと、戻ってきた安藤さんが猫のように笑った。
「ロマンチック、じゃないの？」
と。

「ああ、そうか。でも、なんだか 現実味の無い感じで。ファンタジーって感じが、します。」

温かなカップを手に、そう答えると、なるほど安藤さんは頷きを返してくれた。

「河野も、同じ事を言ってたなあ」

「え？」

「夢や希望なんて幻だー そんなものはファンタジーだーって」

「夢や希望、って。それはまた、意味が違ってくるんじゃないですか？」

「んー。んー？ どうだろうね。現実にしようと思っていた身からすれば、叶えられなければ幻想ってことなんじゃないかな」

「……それって、どういう」

叶えられ、なかった？ トオル君が……夢、を？ それは、お菓子の子の事なんだろうか。

私が疑問を形にできないまま口を半開きになっていると、乱暴にドアベルが鳴った。

「噂をすれば」

決して待っていたわけではないと安藤さんが肩をすくめ、来客を出迎えた。

「わり、ちよつと雨宿り。コーヒーマグ。ホットで」

「一杯につき滞在可能時間は三十分です」

「嘘つけ！」

入り口で、雨に濡れた上着を脱ぎながら、トオル君は安藤さんと軽い掛け合いをする。

私にそこへ口を挟む事が出来るわけも無く、ぼんやりと近づいてくるトオル君を見上げるしかできなかった。

「お 良子ちゃん。元気そうだね。久しぶり」

そんなことを言うトオル君は、少し疲れているように見える。

「……うん。トオル君は、お仕事終わったの？」

「いや、今日は……別件」

言葉を濁しながら、私と一つ席を空けたところに腰掛ける。

「あの」

「うん？」

出された水を一気に飲み乾し、おかわりを要求する横顔へ、私は思い切って声を掛けた。

「お菓子は また作ってるの？」

しばらくは町内会でのイベントは無いから、そちらでの需要は無い事は知っている。他に、以前の安藤さんの時のように、誰かの為にたくさん作ったり、なんてしているのだろうか。

自分なりに、出来る限り当たり障りの無い質問をぶつけたつもりだった。トオル君は、少しだけ渋い顔をして、それをパツと戻して。

「夏はかき入れ時だからね。本業に専念してるんだ」

「お菓子じゃないの？」

「あれは趣味。」

「嘘でしょ」

「本業ではないよ」

否定はしない。肯定もしない。短く答える声音に苛立ちを感じ取り、私はそれ以上、何も言えなくなってしまう。

「こら、可愛い子を苛めないの」

安藤さんが窘めながら、トオル君の前に淹れたてコーヒーを置いた。温かな香りがこちらにも流れてくる。

「良子ちゃんには、話していないんでしょう？ だったら、飛んできて当たり前の質問じゃない」

「……」

あ、トオル君が拗ねている。女子高生から見てもそれと解るほど、あからさまに拗ねている。遊んでもらった頃を思い出させる、幼い表情。

それから眉間にしわを寄せ、項垂れて、溜息を盛大に吐き出し、そうして改めて顔を上げた。私に向き直る。

「俺さ。東京のケーキ屋、体壊して辞めたって言っただろ？」

「うん」

ただ、具体的にどこをどう、とは聞いていない。

「体壊してさー………ついでに心も壊してな。帰ってしばらくは、もう、人として使い物にならなかった」

「……………」

忙しい厨房だったけど、ペースに飲まれっぱなしで自分のケアをきちんとできなかったんだ。小さく付け足す。

「通院と療養と。ひたすらボンヤリしてたな。地元に住ても誰とも連絡取らなかったし」

香りを楽しむように、トオル君はカップを口へ運ぶ。

「嫌いになつて辞めた店じゃなかった。俺がヤワじゃなかったら、もつともつと働いて、成長して…一人前になつて。地元戻つて店を構えようって………思ってたんだぜ」

小さな火傷だらけの腕をさすりながら、トオル君は言葉を続ける。
「向いてねえのかなあ、だから負荷が大きすぎて潰れちゃったのかなあ………他に、好きなことなんて見つかるかもしれない。帰つて来てからは、そんな自問自答のくり返し。」

骨ばつた、その大きな手を閉じ開き、しながら。財産だといった、その手を。

「それでもさ、好きなんだ。馬鹿みてえに好きなんだ。体調が落ち着いてきたら、真っ先にシュークリームを焼きたくなった」

「で、それを休日で寝てる私の元へ朝一番に持ってきたと」
迷惑極まりない、という表情で、安藤さんが言葉を拾う。

「だって高校出てからも実家暮らしで連絡付くのつてお前くらいしかいなかったんだよ」

「見事な消去法をありがとう」

カン、安藤さんはスチール製のトレイでタイミング良くトオル君

の頭を叩く。力は入っていない。手で払いながらトオル君は笑う。
「ま そんな感じで、さ。今は町内会のイベントとか……安藤の面倒事なんかで手慣らしさせてもらってるところかな」

面倒事、という言葉に安藤さんの眉がピクリと上がったけれど、それに関して制裁は下されなかった。

「じゃあ、いつかはまた、ケーキ屋さんで働いたり…… お店を開いたり、するの？」

夢みたい。そんな日が来ると良い。目を輝かせ見上げる私に気圧されるように、トオル君は身を引いて、視線を落とした。

「さあなあ……。どうだろうな、俺は器用な人間じゃねえし。」
「それは知ってるけど」

さらりと返すと、トオル君は見るからに凹んだ。

「作っていられば、それでいい。別に商売にしなくたって、手段は色々あるだろ」

「……うん」

万人好みの最大公約数。安藤さんの言葉が脳裏を掠める。

きっと、それじゃあトオル君の作りたいお菓子は作れないんだ。

「商売はなあ……。大変だぞ。全てが自分の仕切りだなんてゾツとする。原価計算から始まって設備の維持費だろ、場所だって……。詳しく聞く？」

「いえ……。なんとなく察しました」

指折り数えるトオル君の姿に、私は大きく首を横に振った。

『しょうらいのゆめは、ケーキやさん！』幼稚園児がよく挙げる職業だけれど、個人で動くとなると、そんなにも大変なんだ。

「これだ！ って店を定めて、雇われるのが一番なんだけどな。ソレでコレだし」

そして自虐的に笑われてしまえば、反論なんて出来るわけがない。
「蓋を開ければ、ただの幻想。でも、閉じていればファンタジック。同じ意味の言葉なのに違う響きになる。馬鹿馬鹿しいけど、単純な錯覚だよ。……気づいて蓋をして、夢に浸るのも、別に悪いことじ

やない」

「……トオル君は、もう夢を見ないの？」

「見るよー 悪夢。ふふ」

笑いついでに、椅子に掛けていた上着から折りたたまれた紙を取りだす。

「伝手があつて、菓子を卸してみないかって誘われた。乗ったには良いが……意見が全く合致しない。」

新規オープン予定のカフェのチラシだった。まだ原案段階らしく、予定図、と建物は鉛筆スケッチだ。

「小規模生産の継続には限界があります。かといって設備投資できるほどは、まだ金が貯まってないし、一本に絞るほどの勝算も無い」
今回は御破談だ。コーヒーを飲み乾して、トオル君はぼやいた。

「けど まあ 好きだからさ。病気みたいに、作ってると思うぜ、この先も」

そして笑う。覇気の無い笑顔だけれど、なんだか心臓が掴まれたようにキュッと鳴った。

「だからさ」

トオル君は、その笑顔のまま、私を向く。

「好きなものって、そう簡単に手放せない。全身に沁み込んでしまっただ。あきらめたふりしたって、捨てたふりしたって、付きまとう。いつそ、幻想だったらって思うもんさ」

なんだろう、その言葉は呪文？ 何かの呪いを受けているかのように、私の心音は跳ね上がる。

「振り返って、きつと気づくよ。けど、それはきつと手遅れじゃない。気付いたときに、また手を伸ばせばいい。現実ってのはそんなんだ」

「はっは、年上風吹かせちゃって」

安藤さんが笑ったところで、追加分のサンドイッチが出来上がり、彼女はそれを窓辺の客へと運んでゆく。

沈黙が降りて、強くなつた雨音が店内に響く。

トオル君は穏やかな表情で、空になったカップを見つめている。
さっきの言葉、まるで自分自身に言い聞かせているみたい。
そんなことを考えながら、私は紅茶の最後の一口を飲んだ。すっ
かり冷えていて、渋みが舌に残った。

(四) (前書き)

エピソード

(四)

またケーキを作ったら連絡するから、遊びにおいで。

別れ際、トオル君は笑顔でそう言った。

安藤さんは、夏休みに入ったらバイトに来ないか、と誘ってくれた。

重ねられる約束に、胸が暖まる。

自分の本心が見えないまま、望む未来の形が解らないまま、下した決断に後悔ともつかない感情を引きずっていたけれど、決して取り返せない事なんかじゃない。いつでも戻ればいいし、迷わず進めばいい。

自分のずっと先を歩く人達が、そう言って笑って背を押してくれる。

それが、どんなに心強いことか。

ふふつと笑い、私は今日も駐輪場で、暑苦しく晴れた空を見上げていた。目を閉じて耳を澄ませば、体育館やグラウンド、格技場で、色んな部活動の音がする。

……剣道だけが特別じゃない。でも、私には特別だったんだ。

好きで、好きだから、背を向けた。今は向き合うことが出来ない。山積する言い訳の中、それだけは本心だった。自覚できてる。

懐かしいな、そう思う事がある。

戻りたいな、そう思っているのかどうかは、自分にもよく解らない。

昇華しきれないのは自分が子供である証拠なのだと思う。
いつか。

そう、細い願いを掛けながら、日々を過ごす。

いつか。

幻想めいた逃避だろうかと思いつながら、そう願うしかない。

私が、自分だけの答えを見つけられますように。

そうやって、幻想なんかじゃなく、現実を見据えて、若さという財産を投じていくんだ。

晴れ渡る夏の青空に、懐かしい匂いと音が響く。声が聞こえる。

辞めてから一カ月と経っていない剣道部が活動する格技場を振り返り、私は竹刀の感触が残る手を、閉じ開きした。

もうすぐ、夏休みが始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8045y/>

ファンタジア・ファンタジア

2011年11月23日22時52分発行